学位請求論文審査報告要旨

2017 年 3 月 8 日

申請者　　田　昊
論文題目　日本語教育文法における「言いさし」の研究

論文審査委員　　庵　功雄
石黒　圭
小磯花絵

１．本論文の内容と構成

本論文は、現代日本語の話し言葉に頻出する「言いさし」を、日本語教育文法の立場から多角的に調査し、記述したものである。

本書の構成は次の通りである。

第一部　本研究の前提
第１章　序論
　1.1　研究背景
　1.2　日本語教育現場における「言いさし」
　1.3　研究目的及び課題
　1.4　研究方法
　1.5　本論文の枠組み
第２章　本研究における「言いさし」の捉え方
　2.1　話し言葉の「文」
　2.2　従属節で終了する表現
　2.3　「言いさし」の位置づけ
　2.4　「言いさし」の形成要因
　2.5　本研究の研究対象
　2.6　本章のまとめ
第３章　日本語教育文法と「言いさし」に関する先行研究
　3.1　日本語教育文法の概観
　3.2　「言いさし」に関する先行研究
　3.3　本章のまとめ
第二部　コーパスにおける「言いさし」の使用実態に関する考察
第４章　『名大会話コーパス』における「言いさし」の形態・統語・意味的な特徴
　4.1　導入
　4.2　先行研究
　4.3　研究目的及び課題
　4.4　考察対象

4.5　考察データ
4.6　データの分析
4.7　データの考察
4.8　日本語教育への示唆
4.9　まとめおよび今後の課題
4.10　本章のまとめ
第５章　現代中国語コーパスにおける中国語の「言いさし」の形態・統語・意味的な特徴
5.1　導入
5.2　中国語の複文の分類
5.3　先行研究
5.4　中国語における「けど」類の「言いさし」の使用実態
5.5　中国語における「有標識言いさし」および「無標識言いさし」
5.6　本章のまとめ
第６章　『日本語話し言葉コーパス』における「言いさし」の音声的な特徴
6.1　導入
6.2　先行研究
6.3　考察対象
6.4　研究課題および仮説
6.5　研究方法
6.6　結果および考察
6.7　まとめおよび日本語教育への示唆
6.8　本章のまとめ
第三部　「言いさし」の知覚処理状況に関する実験調査
第７章　中国人学習者における「言いさし」の知覚情報処理状況に関する調査
7.1　導入
7.2　先行研究
7.3　研究課題
7.4　調査の仮説
7.5　調査の基本情報
7.6　調査の結果
7.7　結果に関する考察
7.8　日本語教育への示唆
7.9　本章のまとめ
第８章　中国語母語話者が母語での「言いさし」の認知・産出状況に関する調査
8.1　導入
8.2　断り行為における「言いさし」
8.3　先行研究
8.4　研究目的及び課題
8.5　研究方法
8.6　結果の分析・考察

8.7　日本語と中国語における「言いさし」の相違
8.8.　まとめおよび日本語教育への示唆
8.9　本章のまとめ
第９章　中国人学習者における「言いさし」の聴覚情報処理に関する実験
9.1　導入
9.2　先行研究
9.3　研究課題
9.4　実験仮説
9.5　実験の流れ
9.6　実験結果の分析
9.7　考察
9.8　まとめおよび日本語教育への示唆
9.9　本章のまとめ
第四部　本研究のまとめ
第 10 章　結論および日本語教育への示唆
10.1　本研究のまとめ
10.2　日本語教育への示唆
10.3　今後の課題
付録
引用文献

２．本論文の概要

本論文は 4 部 10 章からなる。

第 1 章から第 3 章は第一部を構成する。

第 1 章では、本論文の研究背景が述べられる。

第 2 章では、本研究における「言いさし」の捉え方が、話し言葉における「文」の概念規定の研究史をたどることを通して論じられる。「言いさし」は基本的に話し言葉に固有の現象であるが、「田中さん、紹介してよ。―了解。最近会う機会は少ないんだけど。」のような「言いさし」表現は、主節が存在しないため、統語論的観点からは不完全なものであるように見える。「言いさし」について考える際には、一見「不完全」に見えるこの表現をどのように考えるかが問題になる。この章では、この問題が「話し言葉における文とはどのようなものか」という観点から研究史を紐解きつつ論じられている。結論として、現在話し言葉の分析に広く用いられている節境界の概念が援用されている。

第 3 章では、日本語教育文法に関する研究史と本研究の立脚点が述べられている。

第 4 章から第 6 章は第二部を構成する。

第 4 章は本論文の中心的な成果の 1 つであり、現代日本語の会話コーパスとして広く用いられている「名大会話コーパス」における「言いさし」の「けど」類（「けど、けれど、けれども、が」の総称）の使用実態が多角的に論じられている。その一例として、「けど」類の「言いさし」では前接する述語が否定形である割合が有意に高いということがある。

これは、「けど」類の「言いさし」が語気緩和の機能を強く持っていることの具体的な現れと解釈することができる。

第 5 章では、中国語との対照という観点から「言いさし」が論じられている。本論文では、小説や映画、ドラマの日中対訳や日中対訳コーパスを用いて、日本語で「けど」類の「言いさし」が用いられている場合に、中国語でどのような表現が用いられているかという観点から、中国語における「言いさし」を帰納的に定義する形で議論が展開されている。

第 6 章では、「日本語話し言葉コーパス（CSJ）」における「言いさし」の「けど」類の音声的な特徴が考察されている。CSJ に付されたタグを利用し、「継続型の「けど」類」（＝接続助詞に相当）と「終了型の「けど」類」（＝「言いさし」に相当）との違いが多角的に検討されている。

第 7 章から第 9 章は第三部を構成する。

第 7 章では、中国国内（JFL=Japanese as a Foreign Language 環境）の中国人日本語学習者の「言いさし」の知覚情報処理に関する調査結果が論じられている。調査では、アンケートとフォローアップ・インタビューを用いて、中国人学習者が「言いさし」の発話意図をどの程度理解できているかが考察され、中国国内の中国人学習者には「言いさし」の発話意図の理解に関する困難点が存在することが明らかにされている。

第 8 章では、中国語母語話者と日本語母語話者の母語における「言いさし」の捉え方に関する調査結果が論じられている。調査では、談話完成テストを用いて、社会的上下関係と親疎を変数として設定された 12 場面における発話としてそれぞれの母語話者が想定する言語表現を調べ、そこで使用された「言いさし」について詳しく検討が加えられている。

第 9 章では、中国人学習者（JFL 環境および JSL=Japanese as a Second Language 環境）の学習者と日本語母語話者に対して、CSJ のデータから作成した「けど」類の音声データを用いた聴取実験を行った結果が論じられている。実験は、「けど」類までを聞いたときに、その後が継続すると思うか終了すると思うかについてコンピューター上で反応させる形で行われ、その結果が詳しく検討されている。

第 10 章では、第 4 部として、本研究のまとめが行われている。

３．本論文の成果と問題点

本研究の成果は次の通りである。

第一は、「言いさし」について「けど」類を中心に多角的に考察を加えたということである。これまでも「言いさし」に関する研究は散発的には行われてきたが、大部分は記述的な指摘に留まっており、言語コーパスを用いた定量的な考察はほとんどなされてこなかった。その点で、本研究は、「言いさし」の国語学・日本語学における定義から出発し、日本語の話し言葉コーパスを利用した使用実態調査および音声的特徴の分析を行い、その結果抽出された「言いさし」の音声的、形態・統語的、語用論的特徴を分析するとともに、その結果が中国人学習者にどの程度理解されているかを考察するという形で、一連の連鎖的な考察によって、現代日本語における「言いさし」の実相を包括的に明らかにすることにかなりの程度成功している。

第二は、第一の点とも関連するが、日本語教育文法研究における具体的な方法論の提示ということである。日本語教育文法研究が日本語教育学の研究分野として本格的に認知さ

れるようになったのは2000年代以降とまだ歴史は浅い。そうした中で本研究は、従来、個別の研究はあったものの1つの主題についてまとまった考察が発表されることはなかったこの研究分野に、研究上の具体的な展開例を提示し、今後の進展の一つの方向性を示し得た功績は大きいと言える。

第三は、新たな研究対象の掘り起こしということである。第6章で行われているCSJを用いた「継続型の「けど」類」（＝接続助詞に相当）と「終了型の「けど」類」（＝「言いさし」に相当）との比較は、話し言葉における「文」とはどのようなものであるかということに関する研究の一環に位置づけられるが、「言いさし」というある意味で「不完全」な形式を取り上げることで、話し言葉において「文」という概念を設定することは妥当なのかという、戦後の話し言葉研究を通底する問題意識に、音声的特徴という面から新たなアプローチの可能性を提示したものとも言える。また、第5章で行われている中国語における「言いさし」の捉え方は、共通する意味分野を設定してそこにおける言語表現の異同を考察するという手法を採ったものであり、近年行われつつある新しいタイプの対照研究の手法の具体的な成果と把握することが可能である。

こうした成果を挙げている本論文であるが、問題点も存在する。

第一は、「文」成立に関する研究史の把握にやや正確さを欠く点があることである。「言いさし」の規定において、「文」の捉え方に関する認識は不可欠であり、この点で時枝誠記の文理解の把握は重要である（例えば、戦後の話し言葉研究の1つの潮流を作った国立国語研究所の『話しことばの文型』は時枝の考え方に基づいている）が、本論文の時枝理解にはやや疑問の余地がある。

第二は、予測に関する点である。「言いさし」を教育現場で学習者に提示する場合、予測という観点を持ちこむのは必然であり、意義深いものと考えられる。しかし、本論文で考えられている予測が何を指すのか、予測の研究史を十分に踏まえたうえで提示されていない点が惜しまれる。本論文で問題にしている予測がどのようなものを指すのかが研究史上に位置づけられていれば、学習者への提示の方法がより可視化されたように思われる。

第三は、日本語教育に関連する部分である。分析の結果に基づき日本語教育への大胆な示唆が示されている点には独創性が認められるものの、現場で行われている教育の実態を正確に踏まえ、実践における検証を行うことが望ましかったと言える。そうすることで、本論文で示された示唆がより説得力が持つように思われる。

こうした問題点は存在するものの、これらは本論文全体が挙げた成果に比べれば大きな瑕疵とは言えない。また、田氏自身もこれらの問題点に気づいており、今後の研究において、上記の問題点も確実に改善されると考えられる。

４．結論

以上から、本論文が学位論文に値する優れた研究であることを認め、田昊氏に一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考える。

最終審査結果の要旨

論文審査委員　　庵　功雄
石黒　圭
小磯花絵

2017 年 2 月 13 日、学位請求論文提出者、田昊氏の論文「日本語教育文法における「言いさし」の研究」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、田氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって、田昊氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有すると認定し、最終試験において合格と判定した。